

## 富山市日本海文化研究所設立のころ

富山市日本海文化研究所所員

富山市教育委員会埋蔵文化財センター所長

藤田 富士夫

### 1. 研究所設立の遠因

富山市日本海文化研究所設立の遠因に、1974年の富山市杉谷4号墳(四隅突出型方墳)の発掘がある。それは出雲特有の墳形で、日本海ルートによる高志と出雲の交流を示す。それに賛意を表されたのが島根大学の山本清先生と和洋女子大学の寺村光晴先生であった。ともに日本海側の遺跡を研究対象とされていた。

一方、某国立研究所の先生は、「富山に大和と異なる古墳は無い。古墳はすべて大和の影響で造られている」とされた。その後、四隅突出墳を、古墳とは違うとして「墳丘墓」の名が編み出された。底流に大和中心史観がある。四隅突出墳は巷間の古墳論を見直すメッセージを送り続けている。アンテナは研究所が目指す「地域学」の中にある。地域学とは地域重視の視点にたった検討をいう。

### 2. シンポジウムの開催と研究所

1981年3月朝日町の旅館で、富山市の「あしつき文化財学級」受講生を対象として森浩一先生による「古墳発生期の諸問題」の講演会を催した。四隅突出墳とは何かを問う意味があった。そのとき、「大阪で、古代日本海文化のシンポジウムを行うが来ませんか」と、誘っていただいた。とっさに、日本海地域では行なわないのですかと尋ねた。

これがきっかけとなって、その年の11月に富山市教育委員会が主催して日本海文化シンポジウムが開かれた。

シンポジウムは第1回、日本海文化論が成立するかどうか(1981年)。第2回、日本海沿岸地域の“相互関係”の検討(82年)。第3回、東アジア的視点からの検討(83年)をねらいとした。

特別講師には、松本清張、黒岩重吾、司馬遼太郎など著名な作家を招いた。個性は豊か、神経は細やか。エピソードの一つ。黒岩先生は機嫌が良いとカラオケで「終着駅」や与謝野鉄幹作詞の「妻を恋うる歌」を歌われた。

当初、シンポジウムは3回で終わる予定だったが、継

続の声があがり、結局、1994年まで計10回行った。3回目のシンポジウムで「日本海文化研究所」設立の話が出て1986年9月に発足した。

### 3. 日本海文化研究所の設立と活動

日本海文化研究所は、シンポジウムの趣旨を市民文化として継承し発展させていくとして発足した。シンポジウム(学者による最先端の研究)と日本海文化研究所の活動が両輪となって、富山市から日本海文化研究が継続して発信されることが期待された。

当初、「日本海文化などあるはずがない」と、某大学の先生から、「協力できない」と断られた。当時は、まだ「裏日本」が一般に使われていた。

シンポジウムや日本海文化研究所の活動を通じて、今日では、「裏日本」の死語化、自治体の日本海文化への注視、類似シンポジウムの開催、研究者の国際交流、学際研究、行政設置の研究所などと広がりを見ている。

とりわけ1991年12月のソ連邦の崩壊を機に、日本海諸都市の「環日本海交流」が加速した。今日、「日本海文化」が定着し、その先駆けを研究所が果たした。

### 4. おわりに

研究所は、ささやかな事務所をもっているにすぎない。ここに20周年を迎えることができたのは、多くの市民や研究者の支えがあり、歴代所長や事務局職員の努力があったこと。研究所が「地域学」としての日本海文化論の確立に大きく寄与し、市民、研究者がともに成果を共有できる研究所として一層発展するのを期待したい。

【註】以下の①、②についても発言したが、個別に論旨を述べているので、ここでは割愛した。

①「日本海」の呼称問題について⇒「マテオ・リッチの墓を訪れて」『富山市日本海文化研究所報』28、2002年。

②シンポジウムや研究所の活動と成果⇒「島と半島の視点から」『富山市日本海文化研究所紀要』16、2002年。「地域学の先駆的実践“日本海文化シンポジウム”」『地域学から歴史を読む』大巧社、2004年。